

彌永昌吉先生を悼む

彌永昌吉先生は去る6月1日にお亡くになりなされた。昨年10月から目白の聖母病院に入院され、ご家族、殊に信美さんご夫妻の、手厚い看護を受けておいでになり、4月には満100才のお誕生日を迎えられた。先生は充実した長い一生を終えられ、いわば天寿を全うされたわけであるから、むしろおめでたいことと申し上げるべきかもしれない。しかし私達長い間先生の暖かいお人柄に接し、力づけられてきたものにとっては大変悲しいことである。

先生は80才を過ぎられても大変お元気で、学習院大学の整数論セミナーには毎週おいでになり、1994年(先生と同じ88才の)アンドレ・ヴェイユが京都賞受賞のため来日したときにも、地下鉄でホテルまで会いにお出でになるほどであった。その年の春、先生の米寿をお祝いして岩波書店から(英文の)「全集」(Shokichi Iyanaga, Collected Papers)が出版された。しかしそれ以後も、先生は「ガロアの時代、ガロアの数学」(シュプリンガー・フェアラク東京, 1999, 2002), 「数学者の20世紀」(2000), (自叙伝風の)「若き日の思い出: 数学者への道」(2005)(いずれも岩波書店)などのご著書を次々に出版され、この春には以前かかれたものではあったが、(長年ご親交のあった)「クロード・シュヴァレーの類体論に関する業績」の解説を、日本数学会の新シリーズJJMの創刊号に発表されたりなされた。—しかし、2001年正月に奥様をお失くしになってからは、大変お力を落としておられたご様子であった。

先生は1926年に東京(帝国)大学数学科に入学され、高木貞治教授の下で当時最も深遠な理論とされていた「類体論」を深く研究された。(ご著書によれば、すでに1915年、9才のとき、長野県松本の小学校の先生から、「日本には高木貞治という偉い数学の先生がいる」ということをきかれたそうである。)高木・アルチンの類体論は1920-27年に一応完成されたのであるが、先生が研究を始められた当時、残されていた分岐理論や単項化の問題などに関して、重要な貢献をなされた(これについては「全集」、および三宅克哉氏の文を参照)。

1931-34年のヨーロッパ(主にハンブルグ、パリ)留学をおえてご帰国後は、1936年に退職された高木教授の後を受けて、1942年から25年間、第2次大戦の戦中戦後の最も困難な時代を通して、東大教授として教室の運営、学生の指導等の職責を果たされた。

(先生は1935年に初めて、高木教授の(最後の!))「微分・積分学」の演習を受け持たれたが、そのクラスの中に、小平邦彦、伊藤清、河田敬義、古屋茂の諸氏がおられた。)またご退職後は学習院大学教授としてさらに10年間教育・研究を続けられた。1978年

には日本学士院会員になられた。

先生は戦後の日本で、数学教室ばかりでなく、日本数学会や学術会議においても、数学教育・研究の体制を再建し、さらに世界的水準にまで整備充実させるために非常なご尽力をお続けになった。一高木教授を日本の現代数学の生みの親とすれば、彌永先生はその育ての親ともいうべきであろう。(故)岩澤健吉先生が、「彌永先生には、現代数学とはどういうものかということを教えて頂いた」といわれていたことが大変印象的であった。

私が東大に入学した 1947 年には、先生は前期(旧制 1 年生)の「幾何学」を担当しておられ、線形代数を含めて系統化された(先生独自の)アフィン・ユークリッド幾何学の講義をされていた(その内容については、「幾何学序説」, 岩波書店, 1968, 参照)。しかしこれ以外にも種々の話題について講義をされた。その前年にはフォン・ノイマンの“概周期関数”の講義をされていて、私は一高の同室の木下素夫氏に誘われて(もぐりで)聴講にいった記憶がある。その他トポロジーの講義でベッチ数の不変性の話もされた。これらは先生のご考案による証明法を紹介されたものであった。

先生は特に日本の数学の国際化に力を尽くされ、先に名前をあげたシュヴァレーやヴェイユを日本に招かれたり、多くの国際会議の開催のためのイニシャチブをとられた。ご自身長い間 IMU(国際数学連合)の役員を務めておられ、また東京の日仏会館の運営にも深く関与しておられた。私達にとっては、特に 1955 年に戦後初めて開かれた、東京・日光の「代数的整数論」の国際シンポジウムが強いインパクトを与えた。これについてはすでに何回か書いたことがあるので、繰り返さないが、彌永・秋月両先生のご努力によって実現したこの会議が、直接間接に 20 世紀の整数論の世界的発展のために大きな原動力になったことは疑いない。

これらの事務的にも複雑なお仕事をされながら、先生はお忙しそうではあったが、いつも明るく、よく笑い声をあげておられたご様子が忘れられない。—この東京・日光の会議のとき、外国からきた 10 人の数学者達は、“予言者”と呼ばれていたが、ヴェイユが戯れに作ったソネットの最後に、(正確な表現は忘れたが)「予言者達がどんなに騒いでも、彌永の一言で皆眠ってしまう」("... Iyanaga avec un seul mot les endormi") とあったのを覚えている。

彌永先生は、語学に非常にご堪能でいらっしゃり、10 か国語を理解されるといわれていた。それは文学に強い関心をもっておられたからでもあり、特に詩や短歌にご造詣が深かったように拝察する。マラルメの詩 *apparition* を読んで下さったこともある。私が初めてフランスにゆくことになったとき、H. カルタンあての手紙を何通もかかなけれ

ばならなかったが、その度に丁寧に添削，というより書き直しをして下さった。翌日それを清書して伺うと，ここはやっぱりこうかく方がよかろうとおっしゃりながら，ご自分のフランス語をまた直して下さることもあった。パリに着いてカルタンに会った後で，彼は私のフランス語が手紙から想像していたのに較べあまりに下手なのに驚いたということをお伝え聞いた。

先生には多くのご著書があり，教科書や専門書（たとえば，「現代数学概説」，小平邦彦氏と共著，岩波書店，1961）の他にも，多数の入門書・啓蒙書をかいておられる。先生のお人柄を反映して，これらのご本は非常に懇切丁寧にわかり易くかかっている。私の世代では大学に入る前後に，先生の名著「現代数学の基礎概念（上）」（弘文堂，1944）を読んで，現代数学的考え方の洗礼を受けたものが多いと思う。先生は数学史にも深い興味をもっておられたので，その方面で翻訳・監修された書物も多い（たとえば，「クライン：19世紀の数学」，共立出版，1995）。また先生が中心になって（最初に）編集された「岩波・数学辞典」（第1版，1954，現在第4版準備中）は外国にも例をみない内容の充実した“辞典”で，初学者にも専門家にも非常に有用であり，日本の数学者がこの一冊によってどれだけの便宜を受けたか計り知れない。

このように20世紀，昭和から平成にかけての長い間に，日本の数学社会が彌永先生から受けた恩恵を挙げてゆけば言い尽くすことはできないであろう。—しかし私にとっては，何よりもただ先生がいつも暖かい目で見守っていて下さったという，そのことによって大きな生きる力をいただいたことに感謝しなければならない。深い感謝の気持ちをこめて，先生のご冥福を心からお祈りする。

佐武一郎（カリフォルニア大学・東北大学名誉教授）